

山の百花

浅見 村田 淳子

【55】シラヤマギク

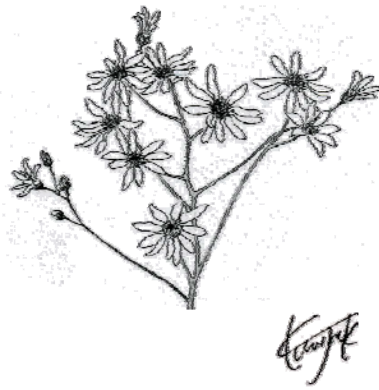
初秋の高原に咲く白い野菊は種類が多く、交雑して区別がつけにくい。一般にはシロヨメナが数も多く、生育域も広い。大型化して壮大に咲き誇るゴマナや、小柄で可愛らしいハコネギクもあるが、私はどこか寂しげな風情で点々と咲くシラヤマギクに心を惹かれる。

寂しげに見えるのは、花びらの数が五、六枚と少ないせいだろうか。それもとどこころ抜けたようなルーズな並び方をしている、「歯が抜けたような、乱れた感じ」と酷評する図鑑もあるが、私はそこにまた一種のほかなさのようなものを感じる。群落をつくらないうことも、孤高の花のイメージを与えるのかもしれない。

茎が赤い色をしているのが特徴の一つだが、時に赤くならないこともあり、たまたま花びらの数が少し多かつたりすると、シロヨメナとの区別に迷うことになる。しかしもう一つの特徴は葉にあつて、シラヤマギクは下のほうにつく葉が長三角形で柄があり、その

柄にはひれがついていることに注目すると見分けやすい。

一方、ヤマシロギクというまぎらわしい名の花もあつて混同されるが、これは別名をイナカギクといつて東海地方より西の山地に生え、関東地方で出会うことはないようである。



【56】センジュガンピ

図鑑によると、この花は「東北地方から中部山岳地帯に分布し、亜高山帯の湿った場所に白い花を開く」とされていて、比較的限られた地域に分布する植物であるらしい。

湿った暗い場所に咲く白い花といえ、すぐにシロバナエンレイソウやサンカヨウを思い浮かべるが、雪解け後の早春に咲くこれらの花が命あふれるばかりのみずみずしい白さであるのに対し、センジュガンピ

の白はむしろひっそりと物静かで、しかし決してなよなよとした感じではなく、あたりをはらうようなすがすがしい気品で人々の目を引きつける。

ナデシコ科であることは、五枚の花びらの先端が幾つかに切れ込む花の形からすぐに想像がつくが、その中のセンノウ属だといふのは、朱色のフシグロセンノウや真紅のマツモトセンノウを思い浮かべると、少し意外な感じもする。しかしこれは子房につく雌しべの数による分類であるらしい。

センジュガンピの「センジュ」は中禅寺湖畔の千手ヶ浜で発見されたことによるもので、「ガンピ」は和紙の原料になる雁皮というが、この少し覚えにくい名も、私にはリズムカルな響きを持つように感じられて好ましい。

